

手と手と手

岡山発 国際貢献

「おぼんです」

昨年十月二十日午後六時。

宮沢賢治が学んだ岩手大学（盛岡市）のキャンパスは暗闇に包まれていたが、G36教室は、明るい光の中で約四十人のあいさつが続いた。

「何年やっても活動が広がらない」と市民団体。教師は「地域に根差した教育が必要だが、地域に出ていく余裕がない」と訴える。行政マンや大学教官も「市民や団体との連携を深めていかなければならない」。

「つながりたい」。それが同じ思いを持っていて。

国連キャンペーン「持続可能な開発のための教育（ESD）の十年」を推進するNPO法人・ESD-J（東京）が岩手県で開いた「ESD地

民と官と

域会議」。約三時間の議論を経て、参加者は「持続可能な社会を目指す」という目標で連携していくことを申し合わせた。

同様の地域会議はすでに三十回を超える。全国各地にリーダーが育ちつつある。

壁を越える

ESD-Jは、二〇〇二年の環境・開発サミット（南ア・ヨハネスブルク）で「ESDの十年」を日本政府と共同提案したNGO（非政府組織）の連合体が母体となり、〇三年六月に発足した。

会員は現在、団体百十三、個人二百五十。環境、女性、平和、国際協力などのNGOのほか、企業や大学も加盟。岡山市は自治体唯一の会員だ。

「市民団体は自分の活動で手いっぱいだし、役所内も部

署間の連携は難しい。どうしたら壁を乗り越えられるんでしょうか」

今年二月上旬、東京で開かれたESD-J全国会議。岡山市役所でESDを担当する原明子（四四）は、全

国のリーダーが集まったワークショップに参加し悩んでいた。前日本ユニセフ協会岡山県支部事務局長。昨秋、ESDに共感し、公募で行政に飛び込んだ。「縦割りは行政だけの問

題ではない。大学も大変。岩手大学講師の梶原昌五（四八）岡山市出身が原の発言を受けた。同大は全学共通科目のESD化を目指しており、梶原は学内連携に尽力する立場だ。「NGOも同じです」。会場は悩みを共有する場になった。

「自分の得がみんなの得、地球の得になればいいよ」と原。「私が選ぶ勝手にESD大賞」なら明日からでもできる」。原の明るい声が会場に響いた。

これから

北海道から沖縄県まで、民と官と合わせて総勢百八十人。発足以来、最大規模の全国会議総会は、環境省、文部科学省などの官僚も交え、熱気に包まれた。

ESD-J代表の阿部治（立教大教授）は力強く呼び掛けた。

優秀な活動を表彰し、広報する▽ボランティアではなく、お金になるESDコーディネーター制度を設ける▽ESDをやればやるほど地域経済が潤う「ESD通貨」を提案する。アイデアは次々に出た。

「一人ひとりの意識改革、つまり教育の推進には政府と市民の協働が不可欠だ。これほど多様な団体の連合はかつてないことだが、さらに輪を広げ、知恵を出し合おう」

サミット以後、動きが鈍かった日本政府も三月末、「ESDの十年」実施計画を策定。民と官の協働作業はこれから全国で動き出す。（敬称略）



ESDのリーダーが熱心に意見交換したESD-J全国会議。岡山からは原（中央）と池田（左端）が参加した＝2月

知恵出し合い協働へ